

教育長賞の選評

新城小学校

五年

田中 心悠

「母よりの

電話の奥に

虫の声」

一般的にいつて、母親からの電話は懐かしいものです。小学生ですから同居してはいますが、何かの用事での電話だったのでしよう。離れて暮らしている場合とは違っていても、それでもやはり少しは懐かしいものです。その声の奥に、「虫の声」を聞き落とさなかつた感覚が、この句を文字どおり奥行きのある句にしています。「虫の声」が、懐かしい感じを強める働きをしています。

垂水中央中学校

二年

西尾 美結

「噴煙が

北風列車で

空の旅」

表現のおもしろさが、この句を優れたものにしていきます。普通なら、桜島が噴煙を上げ、それが南に流れて、やがて降灰かと思われないのですが、列車に乗って南への空の旅に出かけていると表現したために、いやな降灰にもある詩情が与えられました。文学では、普通の現象に普通の言葉で特別な表現を与え、新しい意味を生みますが、この句も「噴煙」が別の意味をもちました。

垂水高等学校

一年

梅本 未菜美

「空に描く

打ち上げ花火

時を止め」

「打ち上げ花火」の美しさは、一瞬の美であり、消えゆくものの美です。見るものに一瞬、次にはどのように変化するだろうか、息を吞ませます。その美しさは、華やかさでも変化でもどのようにも表現できます。それをこの句は「時を止め」、つまり時間が止まったと表現しました。花火の時間が止まったとも、見る人の時間が止まったとも解釈できますが、それはどちらでもよく、時間が停まるということ、永遠の美が定着しました。

講評及び今後に向けての指導

【小学校】 俳句を作ろうとすると、まず自然や人のことや世の中の動きなどを観察しなければなりません。次に、興味を感じたそれらのこと、どのような表現を与えるかという言葉を選ばなくてはなりません。「息はずむ 熟したりんご 友のほほ」は、駆け寄って来た友人の頬の赤さがまず目にとまり、それをリンゴに見立てて表現し、印象の鮮やかな句になりました。「赤とんぼ 遊びに入れてと 低飛行」は、近くに飛んで来た赤トンボを人と同じように表現して、成功しました。このような擬人的表現は「冬の朝ふとんがわたしをはなさない」でも行われています。

【中学校】 俳句を作る時は、自然、人事、社会的出来事などの観察に始まり、それらにどのような表現を与えるかが次に来ます。「イチヨウ道僕たちだけの 秘密基地」は、銀杏並木はいろいろに喩えられますが、「秘密基地」と表現しました。秘密基地は、大人は気付かない一つの世界で、子どもには胸躍る印象を与えますが、それを銀杏並木と結び付けたところが成功しました。「種飛ばし 距離を競った 夏の味」は、スイカの種飛ばしでよくやることですが、それをスイカとせず「夏の味」と表現したところが効果的です。「楽しさと 共に消えゆく 夏花火」は、「消えゆく」という表現で「楽しさ」と「花火」の特徴をとらえたところが、印象的な句になりました。

【高等学校】 作句の基本は観察にあります。物事をよく見なくては、表現したいことは見つかりません。文学は表現ですから、言葉を選び、それをどのように組み立てるか、特に俳句は、十七文字の短詩形ですから、一語一句疎かにできません。「せせらぎの 音に混じりて 螢の火」は、聴覚と視覚の組み合わせで、夏の夜の美しさを表現しています。「夕立に 騒ぐ僕らに 蛙鳴く」は、自然現象に湧き立つ人と小動物を一体化した表現が効果的です。「盆休み 父と見上げた 天の川」は、久しぶりの休みでないと、父と子が「天の川」など見る機会もないことでしょう。自然と人事との対比が美しい情景を作り上げています。